さぁ。
「なんだね？」
この野郎！
「なんだい？」
てめぇなんか知らないんだからね！
「マイキだ！」
だからなんだ！　卍！
「とりあえず、そこだけにしといて！」
だからなんだよ！
「始まるってことだ！」
わかったぜ！　コンビニ行ってくる！
「おう！」

という意味のわからない展開に定評がある、おじさんの独り言なんですが。
「そうか、いつものことじゃないのか？」
そうですよね。というか、これって販売されるんかな？

「読者のみぞ知る」
いや、違うだろ。
「筆者のみぞ知る？」
そうじゃないの？
「そうであってほしいな、とは思う」
てめ！
「でもそうじゃないだろ！」
そこで勢いをつける理由は？
「ないです」
タラタラちゃん。
「うぇい！」
うえーい！
「ということで、真坂の楽天何て僕は知らない！」
始まったんですね。
「何が？」
この地を征服した彼のものが帰ってきたんです！
「な、なんだってーー?!」

そうだ！　だから、貴様に伝えなければならないのだ！
「そうか、そうか」
あの地を征服した彼のものは恐らく、三千。
「どうしたの？」
君が忘れていったことだよ。名はない。
「そっか。もうあの日はもう帰ってこないんですね」
そんなことじゃない。もっとまともなことを私は答えている。
「だから、だよね？　私は君のことを知っていた時が最期だった」
そんなことじゃないって。だから、ちゃんと喋って。
「きっと君がそこにいたのはある理由があるからなんだろう？」
それだけは、ずっと秘密にしていたことだからね。
「君の瞳に素敵な思い出を焼きつけたいって思ってた」
だけど、それは叶うことのない願い――。
「思い出だけはずっと残る、筈だったのに」
それは、いつしかの約束だった。
「二人でずっと一緒に居よう」
その言葉をどこで知ったのか。

「その言葉をどこで思い出したのか」
その言葉をどこで忘れたのか。
「もう、今では、思い出せない」
でも、それでいい。
「そう思っていると、夜空の向こう側に月光が輝いていた」
そんな約束だったなって思いながら。
「どうして私の瞳から一筋の涙が流れてくるのだろう」
忘れていた。
「想っていた」
だから、一緒に居た。
「だから、別れた」
それはとてつもない、平和な別れ方で。
「激しい恋心を忘れていった」
素敵な思い出――。
「あっと気付いた」
そっか。
「そのこと自体が、もう言葉だったんだって」

そんなことに気付いた私は思わず苦笑した。
「そして、もう一度、夜空を眺める」
空にある輝きは心の純度を高める。
「そして、いつか、いつか」
また、貴方のことを思い出せたら。
「そのときはまた一緒に珈琲を飲みましょうね」
そう思いながら、私は涙を拭って。
「夜空の月光を眺めていた」

はい、イミフでござる。
「うん、いつものことじゃん」
でも、やっぱり最期の台詞を男性ボイスだったら色々と面倒ですね。
「なんで？」
いや、声優さんの名前出そうとしたけど、なんか、色々と面倒だったんで。
「そうですかい。というか、私の心にはネットなんて知らないっていう定石があるんで」
定跡だ！
「囲碁と将棋の無駄な戦いが」

ここに今始まる！
「神の一手を決める勝負が」
ここに今始まる！
「そして、その訳の分からない勝負を見守る人たちの叫びが」
ここに今始まる！
「……便利な言葉ですね、それ」
ここに今始まる？
「うん」
そうかなぁ？
「カードダスで全てを吐き出せよ」
というかオリパ買ってこい。
「晴れるねさんで？」
うん。
「タイタンとかってこと？」
いや、知っている人いるの？　この流れと読者層が不明なこの物語の中で。
「君と僕は出逢った」
はっ？

「きっと君の中にある物語のエンディングの中で僕がいたんだよ」
どうした？　今はカードの話をしていたんだが。
「僕と君の交わりを素敵なものにするために僕はここにいる」
知りません、帰れ！
「だけど、このカードショップの中には僕の名前が書かれているものがあるんだ」
それは？　というか、ここショップだったんだ。
「それすら知らない君は、僕と君の関係性を作るわけがなかったと、実証した人がいた」
なに買おっかなぁ？
「その買ったものが全てで終わりだった」
僕と君の始まりは同じ終わりをする。
「君は僕を見て笑った」
僕は君を見て苦笑した。
「だって、そんなにも、苦しそうにしている日常の中で」
僕と君が一緒になったなんて。
「それだけで幸せだったんだ」
且ての僕たちのことを思い出すね。
「笑っていられることがこんなにも幸せだったんだって」

それは、どちらにしろ、僕たちの幸せを作っていたんだって。
「だって、わかっていた」
だから、わかっていた。
「いずれ君はどこかに行ってしまうことを」
いずれ僕はここから立ち去ることを。
「だから、せめて、カードの中に君を刻み付ける行為をしている」
僕を許してくれる？
「一緒に居たときに撮った写真の中にある笑顔をカード化するから」
だから。
「どうか、どうか」
いつまでも一緒に君と居られる、そんな素敵な甘い思い出を。
「カードを見る度に思っていられる、」
そのことだけは。
「許してくれ」
また、君と笑い合えたのなら。
「そのときはまた、笑いましょう」
君が言った言葉を思い出しながら――。

おうおうおう。
「あうあうあう」
いういういう。
「うがいっぱいで」
みんないい！
「はい、イミフ乙」
乙でーす！
「甲でーす！」
はい、後一個わかりませーん！
「じゃ、櫻で」
なぜ、難しい字の方を？
「桜の樹に埋めたから」
いや、ヴィジュアル系バンドのことを言われても。
「わかる人いたら、結構マイナーだと言っておく」
うん。
「でもさ、なんか、これは日記的なモノになっているのは気のせいなのかね」

うん、機能性。
「うん、機能性」
どういうこっちゃ。
「だけど、そういう君のことがわからないと言っても過言ではないのだと、いつになっても君は気付かない」
どうした、何があった。
「私のことをいつまでも引っ張っておくなんて。どうしてそんなことをするの？」
おーい。却ってこい。
「いつまでも君を気付けない僕を許してほしいなんて言わないから」
というか、一人称代わってますよ！
「だから、いつしか、君との約束を果たす時が来たのなら、そのときはまた、よろしくね？」
だって、それが、僕たちの最初で最後の物語。
「いつしか、その物語が語り継がれていくことを知りながら」
それは、ずっと続くと信じて。
「これからを過ごそうと思う」
いつか、僕たちの軌跡を奇跡と崇めるのなら。
「私は神ですか？」

僕は庶民ですか？
「サンプルなんて必要がなかったあの時に戻れることが出来たのなら」
戻れたのなら、僕たちは神々に連なる、世界に戻ってくる。
「そう信じて」
あの日の空の色は何色だったかな？
「そんなことを思っている、ある夏の日の出来事でした」